

写真〈2019年10月5日、渋谷区神宮前〉

良質なグラフィティは、都市空間の断片に注視し、ここに文字やイメージを描く。それによって既存の文脈からずらし、街の見え方を変える。街における人々のふるまいを変える。都市空間を異化するのである。

グラフィティを撮影した〈2019年10月5日、渋谷区神宮前〉という写真。原宿は「神宮前一丁目」の交差点から一步奥へ入る。中小の商業ビルとちぢんまりとした日本家屋が雑居する閑静な一角。角を曲がると、突如として現れるマスクガール。バブル期に建てられたとおぼしき、いかにも「ポストモダン」な商業ビルの、大きなのっぺらぼうの立面をフル活用して、巨大なマスクガールがこちらを凝視している。いつもはほとんど無気力に見えるのに、ふと振り向きざまに、強い意志をたたえたその眼で見つめられると、一瞬たじろいで、歩みを止める。ちよらどおあつらえむきに、斜めから光が差すことで、よりいつそう面が立つてきて、間然するところがない。なかなか見事なグラフィティだと思つて撮影した。目についたものは、とにかくいろいろ撮つておく。撮影時にはあまり考えず、体の反応に従つて、気になったものは撮つておく。撮つて、あとから、考える。体で撮つて、あとから頭で考えるのである。まずは撮らなければ始まらない。

とにかく撮つて、仕上げて、紙にプリントした。仕事場でプリントを眺めてつらつら考える。まあ悪くないグラフィティだ。

ただ、写真としてはどうだろう。いいものを撮つても、それがいい写真とは限らない。面白いものを撮つても、面白い写真にはならない。たいていは「面白いものが写っている写真」になるだけである。さしあたり優良不可のうちの「可」あたりか。そうしたわけでのプリントは、仕事場の片隅にしばらく埋もれていた。

そこでパンデミック（感染爆発）である。新型コロナウイルスによるパンデミックが、東京にやって来た。とにかく、マスクである。2020年はマスクの年。パンデミックだけではない。香港の民衆の抗議デモにおいても、アメリカにおけるBLM（ブラック・ライブズ・マター）運動においても、とにかくマスク、マスク、マスクである。いきおいマスクガールを掘り起こす。同じ写真でも、パンデミック以前と以後とは、この写真が意味するところは全然違う。

一度はお蔵入りしたものの、がぜん勢いづいて復活した、われらがマスクガール。評価もまずは「良」あたりに上がっただろうか。と、さらによくよく眺めると、この少女、足がない。下半身がない。大地から、切れている。これはまだ何かある。「優」まであと一息。

もう少し考えてみた。

そうだ。幽霊には足がない。妖怪には足がある。

「幽霊に足のない訳 附 妖怪に足のある訳」という一章が、岸田劉生の随筆『ばけものばなし』にある。まさにモノが迫り上がってくるような、きわめて物質的な絵画である代表作、『道路と土手と塀（切通乃写生）』で知られる画家、岸田劉生が、ほかでもない「ばけもの」について書いている。分かったような、分からないような、よもやま話のような絵画論のような文章を、筆にまかせて長々と書き連ねている。ばけものよろしく、何ともつかみかねて興味深い。ここで劉生は、幽霊と妖怪を腑分けしている。いわく、「幽霊とは人間の化したもの」である。「幽霊は大てい、思いを残すとか、うらみをのこす」とかいふ理由で出てくる。よって妖怪よりは「幽霊の方が可愛い」。が、それは「全然主観的なもので客観的には何者もなし」。

一方、「妖怪は人外の怪である」。妖怪は「人外の異常なるもの」すなわち「人類が、他の巨大な動物、未知の動物、または自然の威力等に対して持った実感に基づく」。つまり「怪」である。「もののけとは、物の気、または物の怪」であって、「ともかくも幽霊よりはもっと客観性に富んだ存在である」。よって、もののけは当然「非人情」で、故にむしろ「可愛気」がある、「可愛い気分がある」とまで言う。